

平成三〇年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二九号 抜刷

郷家における素稿の作成

——出雲国秋鹿郡恵曇郷を例に——

廣岡義隆

郷家における素稿の作成

― 出雲国秋鹿郡恵曇郷を例に ―

○キーワード―出雲国風土記・編集・改恵曇字参・郡家・

地域官人書記能力

一、はじめに―「郷家」について―

当稿は『出雲國風土記』の成稿過程を考察する。この考察はその大枠において『出雲國風土記』に限定されるものでなく、各国風土記の多くに該当する可能性のあるものと考えらる。

ただ、出雲国にあつては、その成立が郷里制の実施¹後の天平五年(七三三)であり、当稿で扱う下部機関の呼称が「郷家」であるのに対し、郷里制の実施より前の時期に成立した風土記、即ち和銅六年(七一三)に発せられた撰進の命後まもなく言上された風土記においては、その下部機関の呼称が「郷家」ではなく「里家」になることがある。

「郷家」は「郡家」(郡衙、郡役所)の下部機関であり、「国―郡―郷」という行政機関における、五十戸を目安単位とする各国

廣岡義隆

における行政組織の役所をいう。法制用語や行政語は音読され、「郡家」ではその読みが「こほりのみやけ」と読むのではなく、音読して「ぐんけ」と読まれた。このことは、地名ではあるが「久宇希」(二十卷本『和名抄』淡路國津名郡「郡家」(久宇希)卷九3才)というウ音便形の「ぐうけ」から明らかである。これにより、「郷家」においても音読により「がうけ」と読まれていたと考えてよい。

「郷家」について、関和彦氏³は「古代村落「官衙」考」において、「郷」への距離表示、「郷家」を髣髴とさせる発掘遺構の痕跡と出土物等々から「郷家」の存在を析出すると共に、『儀制令』「春時祭田」条の「古記」に見える「郷家」について言及する。また内田律雄氏は郷里制下の古代村落の具体像を探り、それぞれ社を有する二・三の自然村落から「里」は構成され、複数の「里」が「郷」を形成する実態を描き、「郷家」の郷長と「里」の里正を指摘する。関和彦氏や内田律雄氏が引く『令集解』「春時祭田」条割注は以下の通りである。

古記云。春時祭田之日。謂國郡郷里毎村在社神。人夫集聚祭。若放祈年祭^③。敷也。行郷飲酒禮。謂令其郷家備設也。

〔令集解〕「儀制令」19「春時祭田」条、『増補国史大系』24七二三頁「古記」に云ふ。「春時祭田之日」とは、国郡郷里の村毎に在る社の神に、人夫祭に集ひ^{ひつと}聚り、若しくは「祈年祭」に放るを謂ふ。「行郷飲酒禮」とは、其の郷家をして、備へ設けしむるを謂ふ。

右の「春時祭田」条は春秋^⑤二季の歌垣に間接的に関わる条文として知られるところである。右に出る「古記」とは大宝令の注釈書であり、この「古記」について嵐義人氏は成立諸説を整理した上で「天平十年前後、大和長岡・山田白金らにより：中略：筆録され」た書であると結論付ける。

右の次第で、「郷家」の語は当時から確かに存したことが明らかである。

二、恵曇郷に関わる記述

風土記の素稿はまず「郷家」で作成されたと見られる。このことは兼岡理恵氏が出雲郡杵築郷と伊努郷の記事において、神名「八束水臣津野命」（杵築郷と「意美豆努命」（伊努郷という表記の違いから、「郷」単位における原資料作成を指摘する。また拙稿「『出雲國風土記』の会話文体」^⑧）においても、

郡レベルでは、郷家提出の素稿を基にまとめたに違いない。よって他郷（多太郷・大野郷・伊農郷と恵曇郷との文体上の差が出現している。

と秋鹿郡の事例を指摘したところである。

現地情報に関しては、国府よりも郡家が詳しく、郡家よりも郷家がより詳細な現地データを把握していると考えられ、この「郷」レベルにおける風土記素稿の作成ということは、当然のこととなる。

ここに、出雲国秋鹿郡恵曇郷に焦点を絞り、恵曇郷に関わる記述を集約して提示する。

「集約」と記したのは、各「郷家」より提出された素稿は「郡家」や国レベルにおいて編集の手が加えられ、「郷家提出素稿」はズタズタに切断され編集されているのが現状である^⑨。それを可能な限り元の「郷家提出素稿」に戻す形で縦覧しようというものである。

左記A～Gの掲出は、郷レベル、郡レベル、国レベルという認定作業を行うことなく、まずは秋鹿郡における恵曇郷関連記事を集めて見たものである（例外的な除外事項が存在する——後述）。

A 恵曇郷 字、恵伴。

恵曇郷。本の字は恵伴なり。

（秋鹿郡・郷里集覧）

B 恵曇郷。郡家東北、九里冊歩。湏作能乎命御子、磐坂日子命、國巡行坐時、至坐此處而詔、詔「此處者、國稚美好有。國形如畫鞆哉。吾之宮者、是處造事」者。

故云「惠伴」。(神龜三年、改字「惠曇」)。

(秋鹿郡・「惠曇郷」) 条

惠曇郷。郡家の東北のかた、九里四十歩にあり。須作能乎命の御子、磐坂日子命、国巡行り坐しし時に、此処に至り坐して詔ひしく、「此処は、国稚く美好しく有り。国形は画柄の如きかも。吾が宮は、是処に造り事へよ。」と詔ひき。故惠伴と云ふ。(神龜三年に、字を「惠曇」と改めき)。

C 惠杼毛社

惠杼毛社

(秋鹿郡・「神祇官社」) 条

D 惠曇海邊社 同海邊社

惠曇海邊社 同じき海邊社

(秋鹿郡・「非神祇官社」) 条

E 改惠曇字參。陂周六里。在鴛鴦鳧鴨鰒。四邊生葦蔣管。

自「養老元年」以往、荷葉自然叢生太多。二年以降、自然亡失、都無葦。俗人云、「其底陶器厠甕等類、多有也」。自古時々人溺死。不知「深淺」矣。

(秋鹿郡・「川池」) 条

改惠曇字參。陂の周り六里あり。鴛鴦・鳧鴨・鰒在り。四辺に葦・蔣・菅生ひたり。養老の元年より以往は、荷葉自然に叢生ひて太多くありき。二年より以降は、自然に亡失せて、都て葦も無し。俗人の云はく、「其の底に陶器・厠・甕等の類、多く有り」。古より時々人溺れ死ぬることあり。その深き浅きを知らず。

郷家における素稿の作成

F 北大海。惠曇瀆。廣二里二百八十歩。東南並在「家」。西野

北大海。即、自「浦」至「于在家」之間、四方並無「石木」、猶白沙之積。大風吹時其沙、或随「風雪零」、或若「流蟻散」、掩「覆桑麻」。即、有「彫鑿磐壁」二所。「一所、厚三丈、廣一丈、高八尺。一所、厚二丈二尺、廣一丈、高一丈」。其中通川、北流入「大海」。(川東嶋根郡也。西郡内根部也)。自「川口」、至「南方田邊」之間、長一百八十歩、廣一丈五尺。源者田水也。上文所謂佐太川西源、是同處矣。凡渡村田水、南北別耳。古老傳云、「嶋根郡大領、社部臣訓麻呂之祖波蕪等、依「稻田」之澇、所「彫堀」也」。起「浦」之西儀、盡「楯縫郡堺」自毛崎之間、瀆壁峙崑崙、雖「風太靜」、往来船、無「由」停泊「頭」矣。

(秋鹿郡・「大海・浜島」) 条

北のかたは「大海」なり。惠曇浜。ひろ二里一百八十歩なり。東のかたと南のかたとは並びに「家」在り。西のかたは野にして、北のかたは「大海」なり。即ち、浦より「在家」に至る間は、四方に並びに石も木も無く、猶ち白き沙のみ積りてあり。大風風の吹く時には其の沙、或は風の随に雪と零り、或は流に若ひて蟻と散り、桑・麻を掩覆へり。即ち、彫り鑿てる磐壁二所有り。「一所は、厚さ三丈、広さ一丈、高さ八尺。一所は、厚さ二丈二尺、広さ一丈、高さ一丈」。其の中を通ふ川、北に流れて「大海」に入る。(川の東は島根郡なり。西は郡の内なる根の部なり)。川の口より、南の方田の

辺に至る間は、長さ「百八十歩、広さ一丈五尺なり。源は田の水なり。上の文に謂へる佐太川の西の源は、同じき処なり。渡村の田の水は、南と北とに別れてあり。古老の伝へて云はく、「島根郡の大領・社部臣訓麻呂が祖波稚等、稲田の溝に依りて、彫り堀れるなり」。浦の西なる磯より、脩縫郡の堺なる自毛崎までの間、浜の壁は峙ちて畢竟しく、風太静けしといふとも、往來の船、停泊するに由無き頭なり。

G凡、北海所在雑物。蛤、沙魚、佐波、烏賊、鮑魚、螺、貽貝、蚌、甲蠃、螺子、石華、海藻、海松、紫菜、凝海菜。

(秋鹿郡・「北海所在雑物」条)
北のかたの海に在る雑物のな。蛤、沙魚、佐波、烏賊、鮑魚、螺、貽貝、蚌、甲蠃、螺子、石華、海松、紫菜、凝海菜。

右にAとGと挙げたが、他に「山野所在草木禽獸」条が関わりとまずは推考される。しかし、この「山野所在草木禽獸」条は漢方に関係し、国医師とその配下の医生が関与する事項であると考えられ、即ち国レベルの事項と考えられるので除外した。なお、神社名・山野・川池・島等において、恵曇郷に関わる他の箇所が存在する可能性が無いことはないが、右記は確実な箇所に限定しての列挙である。

右のAとGの内、Aは郡総記に関わるものであり、下部機関の郷家からは除外するのが良いと考えられる。Cの神祇官社は

後の延喜式内社の神名帳へと受け継がれる神社名列挙であり、国レベルのリストと考えられる。また、Dの非神祇官社は少なくとも郡レベルで統括された神社名ではなかるうか。それが郷社であったとしても、管轄は郷よりも上部の管轄と考えられる。ただ、神祇官社と非神祇官社の書記及び配列書式が全く同一様式になっており、これは最終段階で整えられたものと見るのが良い。Gの「北海所在雑物」は、各郷からの詳細な上申事項であったと推考される。具体的には、個々の漁場と共に後述、海産品が明記されていたにちがいないが、列挙された一六品目は国において統合された産品リストであると考えられる。そういう限定付きの事項となる。

右に抛ると、AとGの項目中、郷家に関わるものは、B・E・F・(G)ということになる。この内、F条冒頭の「北大海」の三文字は後に国レベルで加筆された可能性がある。そうした含みを容れてのことになるが、B・E・F・(G)の各項は、郷家が提出した原史料に基づいた記事に違いない。

三、「改恵曇字叁」の解明

Eの冒頭部に意味不明な「改恵曇字叁」の五文字が存在し、研究者を悩ませて来た。以下、これに関する記述を列挙する。各書における風土記原文を「」で括って示し、その下の――より下が各書の記述となる。前説に追隨した記述は省略する。

・「改惠曇字参陂周六里」——鈔云、惠曇参陂周六里、今、卅六町、在^{ニル}惠曇郷本郷村^ニ水沢^也也。今埋成^ニ耕田^一矣。

岸崎時照『鈔』

・「参陂周六里」——「参陂」に傍書して、「改惠曇字、此四字アリ。衍文乎。依削之。」（改惠曇字、此の四字あり。衍文か。依りて削れり。）と書き込んでいる。『萬葉緯』

・「改惠曇字参波」——今按此六字ハ転写の誤なるへし。惠曇池の三字歟。下條に惠曇濱あるを證例とすへし。

春満『出雲風土記考』

・「改惠曇字奏」——文例乱たり、一の古本ハ上に池^ノ字を標す、前文に本字惠伴なるを神龜三年改字惠曇とある例にて、此ところは惠曇池〔本字惠伴改惠曇字奏〕と有へし、早より寫し誤か、真龍『解』

・「惠曇陂」（エトモノツ、ミ）——風土記解に「惠曇陂改惠曇字奏波周云々」とし、訂正風土記には、割注に、本字惠伴改惠曇字奏として居るが、本文に池の字がない。

後藤藏四郎氏『考證』

・「惠曇陂〔本字惠伴、改惠曇字奏〕」——原作「改惠曇字参陂、諸本同ジ。解本按「惠曇池〔本字惠伴改惠曇字奏〕」ニ訂ス。今、「池」ヲ「陂」ニ改ム。田中卓氏『校訂』¹⁷「惠曇池 築陂」——底本・諸本に「改惠曇字参陂」とあり、諸説あつて解し難い。訂に「字」を「池」とするに従い、「改」を衍字として削る。諸本の「参」は恐ら

郷家における素稿の作成

く誤字（數であれば「三」とあるのが書式例）。解「奏」とするが、「築」の誤（参の異體字に近似）とすべきか。

秋本吉郎『大系』¹⁸

・「改惠曇字。参陂周六里。」（惠曇^{あとも}と字^まを改む。参^まの陂^{のみ}の周^{めぐ}り六里なり。）——「改惠曇字」の上……「惠曇池」の欠あるか。山川本¹⁹

著名な注釈書の数々を挙げていないが、右に列举した説のいずれかに従っていることによるものである。

この難解な「改惠曇字奏」という文字列であるが、「二」で記した「郷家」で作成した史料ということを念頭に置くと、BとEとは接続することになる。

B 惠曇郷。郡家東北、九里冊歩。湏作能乎命御子、磐坂日子命、國巡行坐時、至坐此處而詔、詔「此處者、國稚美好有。國形如畫軛哉。吾之宮者、是處造事」者。故云惠伴。（神龜三年、改字惠曇）。

E 改惠曇字奏。陂周六里。在駕爲鳧鴨鰒。四邊生葦蔞苣。自養老元年以往、荷渠自然叢生太多。二年以降、自然亡失、都無莖。俗人云、「其底陶器鹿甕等類、多有也」。自古時々人溺死。不知深淺矣。

Cの神祇官社条、Dの非神祇官社条について郷家は関与しない史料の可能性が極めて高いことを「二」で確認した。郷家での作成史料において、右のB条とE条とは接していたはずである。この隣接する二条から、難解な「改惠曇字奏」の五文字と、

すぐ直前の「神龜三年改字惠曇」の割注記事とは恐らく無関係でないと考えられる。後に気付いたことであるが、松本直樹氏『注釈』²⁰が、

「改」「字」などからすると惠曇郷条の「故云惠伴。神龜三年改字惠曇」とある記事との関係が考えられる。

と言及する。この指摘を肯つてよい。前掲の真龍『解』も早くにこれに近い発言をしている(前掲参照)。現状の『出雲國風土記』においては、B条とE条の間に、写本において三九行(細川家本など)を介して位置する。半丁(今の二頁)八行で五頁分にほぼ相当するが、右で見たように、郷家における原史料では接していたに違いないのである。

E条冒頭には「惠曇池」などの標目地名が存在したはずであり、四字句の「惠曇之池」の可能性もある。その標目地名が「改惠曇字叁」の五文字と置き替わったということに違いない。即ち「改惠曇字叁」の五文字は衍入と考えられる。置換衍入ではあるが、中に「惠曇」の地名があり、置換衍入と気付かれることが無かったものと考えられる。こう考えると郡家段階における錯誤の可能性があり、国における最終編集段階でもそのまま見過ごされたものと考えられる。「叁」字「三」の大字は判然としない。「神龜三年」の「三」から来るものであろうか。

標目地名を「惠曇池」ではなく「惠曇陂」とする本があるが、「陂」字は下に付けて読むのが意味上からも文字数からが良い。即ち「陂周六里」という四字句になり、その意味は「堤の一周

は六里(約二・七キロメートル)である」となる。「陂周六里」の四字句はその下の「在鴛鴦鳧鴨鰒／四邊生葦蔞菅」の六字句と照応し、意図的に構文されている。これにより、標目地名は「惠曇池」ということになる。

四、郡家における編集

秋鹿郡は四郷からなる。当風土記の巻頭「九郡集覧」条に、秋鹿郡。郷、肆(里一十二)。神戸、壹(里)。とあり、各郷は里の三里から成り、他に一里二五戸前後の神戸が存在した。その四郷と一神戸については、

惠曇郷 卒字惠伴。

多太郷 今依前用。

大野郷 今依前用。

伊農郷 卒字、伊努。以上、郷別里叁。

神戸里。

(秋鹿郡「郷里集覧」条)

とあり、惠曇郷以外に、多太・大野・伊農の各郷があった。秋鹿郡家ではそれら各郷から言上された元原稿を基に、郡単位の編集が行われた。

秋鹿郡は以下の各条から成る。

郷里集覧(郷名・神戸の提示という郡総記)

郡号由来(郡名の由来説明)

各郷の位置と郷名由来(郡家から郷家への距離・郷名の由来説明)

神祇官社（公費から費用が充当される「神名帳」登載神社名の列挙）

非神祇官社（郷の社・祠に相当する神社名の列挙）

山野（郡家からの距離と山高・麓周の規模等）

山野所在草木禽獸（産出漢方名と木種・禽獸名の列挙）

川池（川は水源地と流れの方向、池は一周の大きさの表示）

入海所在雑物（入海での産品列挙）

大海の浜島（外海に面した浜名・島名等）

北海所在雑物（外海での産品列挙）

通道（郡内の道路里程）

郡末記（郡から国へ、「解」としての上申に関する官人署名）

この内、「非神祇官社」は前記したように郡家における記載が国レベルでの記載かは明らかではない。郡家における記載であれば、多少の縁起が伴っていたに違いない。その場合は国レベルにおいて、縁起の類が削除されたことになる。現状を見るに単なる社名の列挙のみであり、国単位の編集かと推考されるが、国レベルの編集において非神祇官社後の「式内社」ではない、地域の社・祠といった神社）まで把握が可能であったかどうかを考えると、郡家においての手かとも考えられる。

「入海所在雑物」の「入海」は今の宍道湖であり、その産品の列挙になる。魚だけではなく島名も記載されている。

「大海・浜島」の「大海」は日本海であり、「浜島」はその日本海における浜名と島名になり、左の通りである。

恵曇濱。…記述、略…。

郷家における素稿の作成

白嶋。（生紫苔菜）。

御嶋。高六丈、周八十歩。（有松三株）。

都於嶋。（磯）。

著穂嶋。（生海藻）。

「恵曇濱」に関しては詳細な記述があるが、産品の明記は無い。島名は四島が記され、右がその全文である。四島中三島において産品の記述がある。「都於嶋」の「磯」というのは単に磯があるというのではなく、磯に関する各種の産品が獲れるというのが私の読みである。具体的には「北海所在雑物」で記されている「鮑魚、螺、貽貝、蚌、甲冑、螺子、石華、蠣子」などの内のいくつかが採取出来たと推考される。「磯」の字は『出雲國風土記』中に二五例が出、中には単に岩場という自然地形を示す例（意宇郡の「蚊嶋」等）や地名例（出雲郡の「脳磯」もあるが、この「都於嶋（磯）」のように産品表示例が一般的であり、それは海に面した意宇・嶋根・秋鹿・楯縫・出雲の全五郡に見られ、原史料では一々の産品が明示されていたものが、国の段階で簡略化されたものと見られる。「御嶋」にのみ産品記述がなく、松三本という風光上の特徴が記される。「高六丈、周八十歩」は実測ではなく目測であることが他例から分かるが、天平尺で島高一七・八、島の周囲一八・八となり、これは概数としての表示であるが、小島である。

「北海所在雑物」の「北海」は日本海であり、その産品列挙（前記）である。郡家史料では右の浜・島以外に細かな漁場とそ

の産品が記されていたに違いない。そうした委細な記述を国レ
ベルで統括したために、先の「大海」ではなく「北海」という
異なる表現になったものと見られる。

「山野所在草木禽獸」については国レベルの記述であること、
先述した通りであるが、これも採取する医生からすれば何郷何
里の〇〇谷の大きな〇の木の根元で漢方薬草〇〇が採取出来る
などという具体的な記述を伴っていたものに違いない。

郡家からの言上史料に数々の記述が存在しても、体裁の統一
など国レベルで整えられた箇所は少なくないと見られる。

亦、山野瀆浦之處、鳥獸之棲、魚貝海菜之類、良繁多悉
不陳。然不獲止、粗舉梗概、以成記趣。

（国総記「編纂序」条）

亦、山野・浜浦の処、鳥・獸の棲、魚貝・海菜の類、
良に繁多く悉は陳べず。然れども止むこと獲ずあれば、
粗梗概を挙げて、以て記の趣を成さむとす。

右は、巻頭部に記されている国レベルにおける省筆略記の断
り書きである。各郷から言上された大半の項目は委細なデー
タを伴っていたに違はなく、そのほとんどはそのまま郡家史料と
して記載され、言上されたと見られる。その結果が右の簡略記
述宣言となっているものと見られる。

郡末記は幸い保存されている。これについては拙稿『「出雲
國風土記」の副本について」⁽²⁾で記したように、「副本」ゆえに
資料としてメモ的に残されたものであり、国から太政官へ言上

された「解」本体においては存在し得ない記述となる。

郡司 主帳 無位出雲臣

大領 外正六位下社部臣

少領 外從六位上神掃石君

主政 從六位下勳十二等螭朝臣

右は秋鹿郡の「郡末記」である。右の記述は主帳が記載した
箇所であり、「出雲臣・社部臣・神掃石君・螭朝臣」の下に各
人の自筆署名が存したことになるが、それは略されている。ま
た文字のある箇所には郡家印が捺されていたに違いない。

五、おわりに——地域の文化——

天平五年時の出雲国の場合は特殊な面があるが、一般の国府
においては中央官人が下向して政務に携わったのであり、『常
陸國風土記』など、その洗練された文筆はそうした中央官人の
手になると想定されている。

出雲国においては国レベルにおいても、出雲国造で意宇郡大
領である出雲臣廣嶋が総指揮を執り、秋鹿郡出身の肩書の無い
神宅臣金太理が書記として実務を担当した。中央官人ではな
い現地人が筆をとったのである。この背景について、植垣節也
氏は天平五年当時、出雲国守は欠けていて出雲国造が実権を掌
握していたことを指摘する。村尾次郎氏作成になる「天平四—
五年に於ける節度使と出雲國官人の編成」の表も国守のみがプ

ランクであり、村尾氏は「この一覧表に、出雲國守の姓名を見出すことができないことは残念」とする。これが国レベルにおける天平五年時の実態と考えられる。

那家や郷家においては当然のことながら、現地徴用の官人であつたわけであり、郷家レベルにおける現地官人の書記能力の高さが明らかとなる。書記能力と記したが、それは漢文体の書記そのものを意味するものではない。『常陸國風土記』はごく一部を除いて乱れることのない漢文体で記述されている。しかし、拙稿『出雲國風土記』の会話文体―双括式・頭括式・尾括式²⁵⁾で明らかにしたように、『出雲國風土記』においては漢文体と倭文体とが混在する。そういう実態を認めつつも、書記能力は下級機関においても発揮され、機構を支える底力となっていたのであり、風土記はそうした積み上げ作業によって成し遂げられた「解²⁶⁾」であり「文筆作品²⁶⁾」であることを確認することが出来るのである。

【註】

- (1) 郷里制の現実的な施行は靈龜元年(七一五)ではなく、靈龜三年(七二七)と若干くだることが、鎌田元一氏・横山妙子氏の指摘により明らかになっている(鎌田元一氏「郷里制の施行と靈龜元年式」、同氏「律令公民法の研究」所収、塙書房、二〇〇一年三月。初出、一九九一年五月(横山妙子氏『常陸國風土記』に見える「行政単位」―国・県・評・郡について―)、『市民の古代』第一三集(新泉社、一九九一年二月)。
- (2) 『常陸國風土記』や『播磨國風土記』は郡里制をとっているところから、

郷家における素稿の作成

この早い時期の成立と見られる。

- (3) 関和彦氏「古代村落「官衙」考」(同氏「日本古代社会生活史の研究」第六章第四節。校倉書房、一九九四年二月)。
- (4) 内田律雄氏「出雲國風土記」の郷について」(出雲古代史研究会『出雲古代史研究』第九号、一九九九年七月)。
- (5) 「儀制令」には「春時祭田之日」とあるが、その「春」は「秋」を略記し、代表して記しているのであること、「令集解」が引く「古記」の「一云」の中に「春秋二時祭也」とあり、明らかである。
- (6) 風義人氏「古記の成立と神祇令集解」(荊木美行氏編『令集解私記の研究』汲古書院、一九九七年三月)。
- (7) 兼岡理恵氏「風土記」の世界―地方へのまなざし―(『文学』第九巻第一号、二〇〇八年一月。同氏「風土記受容史研究」所収。第一章、二八―二九頁)。
- (8) 廣岡義隆「出雲國風土記」の会話文体―双括式・頭括式・尾括式―(『三重大学日本語学文学』第二十七号、二〇一六年六月)。
- (9) 廣岡義隆「佐太大神条をめぐって―『出雲國風土記』の成書過程の一考察」(大阪大学『語文』第一〇〇・一〇一輯合併号、二〇一三年十二月)の註30、参照。
- (10) 「沙魚」の訓は不明。嶋根郡「入海所在雜物」条に「…入鹿、和余、鰯…」とあり、「和余」はサメと見るのが通解。嶋根郡「北海所捕雜物」条には「…鮪、沙魚、烏賊…」と出る。「本草和名」の「鮫魚」条(第十六卷)に「一名鯊魚」「和名佐女」とあり、その「鯊」の省文の「沙」と見て、一般にサメと見ている。朝山皓氏「出雲國風土記論」古代文化叢書4(島根県古代文化センター、一九九八年三月)は、外海ではサメと言ひ、内海ではワニと言ったかと見る三七頁。或いは「和余」と「沙魚」は別種で、当条の「沙魚」はサメでない可能性も考えられよう。と言うのは、「爾雅」(釋魚第十六)に「鯊、鮓(今吹沙小魚)」とあり、小魚のハゼ(鯊)をいうかと見られるからである。ハゼにはスナフキの別称がある(「爾雅」に「吹沙」とある。「沙」は砂)。その古訓は不明。「沙魚」は日本海に面した五郡の産物として出る(楯縫郡は「如秋鹿郡説」の形で、

出雲と神門郡は「如桶縫郡説」の形で出る。

- (11) 廣岡義隆『佐太大神条をめぐって』(註9)に同じ。

- (12) 岸崎時照著『出雲國風土記鈔』(一六八三年成。島根大学図書館蔵桑原文庫四冊本。同図書館オープンアクセスPDF画像に拠る。別に国文学研究資料館データベース「古典コレクション」として岩波書店から刊行されたCD-ROM版「兼永本古事記・出雲國風土記抄」(二〇〇三年三月)がある。岩下武彦氏は「解題」で『出雲國風土記抄』とする。本の外題は『出雲風土記』、内題は『出雲國風土記』、岸崎時照の注は「鈔日」とあり、私は『出雲國風土記鈔』と認定している。

- (13) 今井似閑、自筆本『萬葉緯』。内題「萬葉緯卷第十五 出雲國風土記全篇」、外題「萬葉緯十五 出雲風土記」。上賀茂神社・賀茂別雷神社蔵、三手文庫本。『萬葉緯』巻二十に享保二年三月の奥書があり、一七一七年以前の成立。秋本吉徳氏『出雲國風土記諸本集』(勉誠社)所収。

- (14) 荷田春満、自筆本『出雲風土記考』(一七三三年冬〜一七二十四年春成。『新編荷田春満全集』第三卷(おうふう)所収。

- (15) 内山真龍著『出雲風土記解』(一七八七年二月)。京都大学蔵本(和田龍次郎写)の臨模本による。千家俊信校訂の版本『訂正出雲風土記』は、この真龍「解」の説により本文とする(文化三年(一八〇六)本居大平序刊行。日本古典全集『古風土記集』上巻、影印所収)。栗田寛「標註」(大日本図書、一八九九年一月)も同じく従う。以下これに従う諸本を略す。

- (16) 後藤藏四郎氏『出雲國風土記考證』(大岡山書店、一九二六年一月)。以下これに従う諸本を略す。

- (17) 田中卓氏「校訂出雲國風土記」(平泉澄監修『出雲國風土記の研究』出雲大社刊、一九五三年七月)。田中卓著作集8『出雲國風土記の研究』所収。田中卓氏「風土記」神道大系古典編7(神道大系編纂会編、一九九四年三月)もほぼ同文。

- (18) 秋本吉郎氏『風土記』日本古典文学大系2(岩波書店、一九五八年四月)。

- (19) 沖森卓也氏・佐藤信氏・矢嶋泉氏『出雲國風土記』(山川出版社、二〇〇五年三月)。

- (20) 松本直樹氏『出雲國風土記注釈』(新典社、二〇〇七年一月)。

- (21) 廣岡義隆『出雲國風土記』の副本について「『上代文学』第一一七号、二〇一六年十一月)。

- (22) 植垣節也氏『風土記』新編日本古典文学全集本・小学館、一九九七年一〇月)二七七頁、頭注二三。

- (23) 村尾次郎氏『出雲國風土記の勘造と節度使』(平泉澄監修『出雲國風土記の研究』出雲大社刊、一九五三年七月)。

- (24) 瀬間正之氏『風土記の文字世界』(笠間書院、二〇一一年二月)。

- (25) 廣岡義隆『出雲國風土記』の会話文体―双括式・頭括式・尾括式―、註(8)に同じ。

- (26) 廣岡義隆は『出雲國風土記』の副本について「(註21)において、『出雲國風土記』は単なる「解」ではなく、「記」としてまとめ上げられた「文筆作品」であるということを示した。

「ひろおか よしたか 本学元教員」